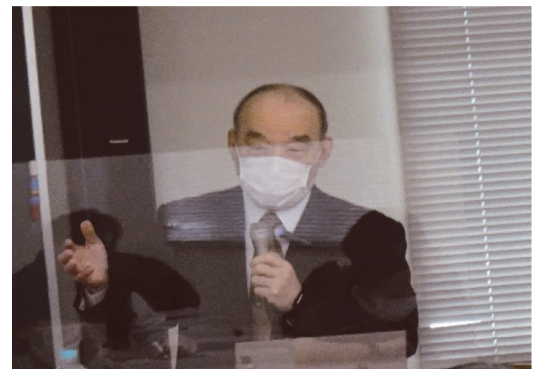


公開講座「魅力ある微生物の世界」

本学 森永 力学長を講師とした公開講座「魅力ある微生物の世界」を、5月21日、6月25日、7月16日、8月20日に開催しました。本学広島キャンパスを会場とした対面形式と、リアルタイムのオンライン配信を併用して開催しました。全4回のテーマは次のようなものでした。

第1回	5月21日	キノコの世界	第2回	6月25日	マツタケの世界
第3回	7月16日	発酵食品の世界	第4回	8月20日	環境浄化と微生物

第1回では、きのこの生活の場と働きについて、生物について共生や寄生をするきのこのこと、死物について植物や動物を腐らせるきのこに大別されることが示されました。次に日本の毒きのこ中毒について、症状により、①細胞を破壊し、肝臓、腎臓に障害を与え、死をもたらす毒、②主に自律神経に作用する毒、③主に中枢神経に作用する毒、④主に胃腸刺激、⑤末端紅痛症状にタイプ分けされ、その中を毒成分によりさらに分類したことが示されました。そして、日本で栽培されている主な食用きのこの種類と薬用効果が紹介され、キノコ菌糸でベトナムの汚染土壌を改良するプロジェクトに取り組んだことが紹介されました。



森永 学長

第2回では、マツタケについて、特に遺伝子に着目したやや専門的な内容が紹介されました。

第3回では、酒、醤油、味噌、納豆、鰯節、漬物などの発酵食品の製造における微生物の役割について紹介されました。

第4回では、微生物が長い時間をかけて地球を浄化して人間が住めるようにしたこと、農薬、汚水処理、トイレなどに微生物が有効利用されていることが紹介されました。

受講者数は、第1回が対面36人、オンライン45人の計81人、第2回が対面39人、オンライン28人の計67人、第3回が対面36人、オンライン26人の計62人、第4回が対面24人、オンライン29人の計53人でした。熱心に質問をされる参加者もおられ、盛会となりました。



第2回講座の様子

県内12大学が集結! 第1回広島県大学生地域連携活動発表会を開催

11月19日に県立広島大学広島キャンパスにて、第1回広島県大学生地域連携活動発表会（以下、発表会）を開催しました。対面・オンラインを含めて約150名の参加がありました。発表会の前半では、湯崎英彦広島県知事からのメッセージを披露の後、基調講演として3名の講師による動画を上映・配信しました。講師とタイトルは、立教大学・門田岳久准教授「ゼミ教育を基盤としたサイト・スペシフィック・フィールドワーク～新潟県佐渡島での10年間の実践例」、徳島大学・内藤直樹准教授「世界遺産と地域遺産の相克：Research Locally, Act Globallyの実践をめぐって」、新潟大学・豊田光世准教授「地域コミュニティとの共創から生まれる探究的学び」です。

後半の学生発表では、12大学の学生による発表が行われました。大学名・タイトルは表のとおりです。学生発表では活動内容に加え、「現地の人々との協働や対話からえるものがある」、「活動資金に苦勞しながら活動している」、「自分たちの活動が出発点になり広島県内各地に広がることを期待する」、「他大学の学生へ一緒に活動しようと呼びかける」など、地域での活動に対する学生の思いが語られました。



県立広島大学「アダプテッドスポーツを通じた地域貢献活動」



発表学生集合写真

参加大学及びタイトル(発表順)

大学名	発表タイトル
叡啓大学	(Re) Discovering Setoda & Lemon
エリザベト音楽大学	親子で楽しめるミニオペラの制作公演を終えて
広島経済大学	子ども達を守ろうプロジェクトの取組みについて
広島工業大学	学校法人鶴学園八千代校舎周辺山城の保存貢献
広島国際大学	地域で支える子育て支援 — LCFと地域のつながり —
広島修道大学	地域つながるプロジェクト2021 (防災意識を高めるプロジェクト)
広島市立大学	小学生とつくりだす絵おと芝居
広島大学	農産物袋詰め補助アイテム
広島文教大学	世羅町の多文化共生事業に関わって
福山平成大学	動物の命を守るためにできること
安田女子大学・安田女子短期大学	専門性を生かした社会連携活動～英語英米文学科の取り組み～
県立広島大学	アダプテッドスポーツを通じた地域貢献活動

発表終了後の発表者どうしの交流会では熱心な意見交換や仲間づくりが行われ、ボッチャ※の紹介を兼ねたボッチャ体験にも多くの学生が参加し、盛り上がりを見せました。発表した学生からは、「それぞれの学生のレベルが高く、今後の考えや活動のモチベーションにつながった」、「他大学が行っている活動について知ることができ、これからの活動の参考になりました」、「皆さん、地域のことを熱心に想い活動していることが理解できました」などの感想を得ることができました。マツダ株式会社の西山雷大特別顧問による講評では、広島県の抱える問題と関連させながら、その活動の重要性が指摘されました。

共催して下さった上記の11大学、後援くださった広島県、中国新聞社、マツダ株式会社、株式会社サンフレッチェ広島には、最後となりましたが深く感謝申し上げます。

※アダプテッドスポーツの一種

広島キャンパス

HIROSHIMA CAMPUS

公開講座

公開講座「けんひろ×SDGs」

本学のSDGs（持続可能な開発目標）に対するさまざまな取り組みを、学外のみなさん、とくに本学を志願する高校生のみなさんに知っていただくための公開講座を企画しました。本学教員の教育・研究活動を理解していただく機会を増やすため、講座を動画で収録しYouTubeによりオンデマンド配信しました。動画には、次のような17の目標それぞれに対する本学教員の研究・教育活動が収録されています。

目標1【貧困】 あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる。

・保健福祉学科 人間福祉学コース：志賀 信夫

目標2【飢餓】 飢餓を終わらせ、食料安全保障及び栄養改善を実現し、持続可能な農業を促進する。

・地域創生学科 健康科学コース：谷本 昌太

目標3【保健】 あらゆる年齢の全ての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する。

・保健福祉学科 看護学コース：黒田 寿美恵

目標4【教育】 全ての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する。

・地域創生学科 地域文化コース：植村 広美

目標5【ジェンダー】 ジェンダー平等を達成し、全ての女性及び女兒の能力強化を行う。

・地域資源開発学科：村田 和賀代

目標6【水・衛生】 全ての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する。

・生命環境学科 環境科学コース：西村 和之

目標7【エネルギー】 全ての人々の、安価かつ信頼できる持続可能な近代的なエネルギーへのアクセスを確保する。

・生命環境学科 環境科学コース：小林 謙介

目標8【経済成長と雇用】 包摂的かつ持続可能な経済成長及び全ての人々の完全かつ生産的な雇用と働きがいのある人間らしい雇用（ディーセント・ワーク）を促進する。

・保健福祉学科 人間福祉学コース：金子 努

目標9【インフラ、産業化、イノベーション】 強靱（レジリエント）なインフラ構築、包摂的かつ持続可能な産業化の促進及びイノベーションの推進を図る。

・地域創生学科 地域産業コース：陳 春祥

目標10【不平等】 各国内及び各国家間の不平等を是正する。

・経営管理研究科ビジネス・リーダーシップ専攻：吉川 成美

目標11【持続可能な都市】 包摂的で安全かつ強靱（レジリエント）で持続可能な都市及び人間居住を実現

する。

・保健福祉学科 人間福祉学コース：吉田 倫子
目標12【持続可能な消費と生産】 持続可能な消費生産形態を確保する。

・地域創生学科 地域産業コース：矢澤 利弘
目標13【気候変動】 気候変動及びその影響を軽減するための緊急対策を講じる。

・生命環境学科 環境科学コース：米村 正一郎
目標14【海洋資源】 持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する。

・生命環境学科 環境科学コース：内藤 佳奈子
目標15【陸上資源】 陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、並びに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する。

・生命環境学科 環境科学コース：青柳 充
目標16【平和】 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、全ての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する。

・大学教育実践センター：岡田 高嘉

目標17【実施手段】 持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する。

・経営管理研究科ビジネス・リーダーシップ専攻：江戸 克栄



講座の収録風景



2023（令和5）年度から、本講座DVDの貸し出しを行います。詳しくは地域連携センターまでお問い合わせください。

研究紹介

食品のおいしさ維持に関する研究

地域創生学部地域創生学科
健康科学コース 助教 松本 茜

食品のおいしさ（品質）は、私たちの身体的・精神的な健康にも重要である一方で、時間の経過とともに変化・低下することが知られています。そして、その評価には味や香りなどの化学的要因やテクスチャー（食感）や温度などの物理的要因が複雑に関わりあっています。たとえば、焼きたてではふっくら柔らかいパンは、置いておくとパサパサして固くなります。お魚も置いておくと色が悪くなり生臭い匂いになり、さらに放置すると苦味を呈し、歯ごたえのない食感になります。食品の品質を長く維持するためには、その変化を客観的に測定する方法を確立し、食品の品質や劣化の指標を明らかにすることが必要です。

私はこれまで、主にパン類などデンプンを主体とする食品を対象として、物理的要因（食感）に関する研究を進めてきました。具体的には、実際の喫食環境に可能な限り近づけたパン類の食感（やわらかさ）測定手法を導き、水や温度の制御、副材料の添加と食感変化との関係について研究してきました。

現在は、新たに食品の化学的要因（味、香りなど）を分析する手法の獲得を試みています。具体的な研究内容としては、魚介類を対象として、食品が安全でおいしく食べられるための指標を明らかにすることを目的に、新鮮な状態から食用できない状態（＝腐敗）までの食品成分（呈味成分、香気成分等）の変化の分析に取り組んでいます。さらに、さまざまな加工・保存条件による品質への影響を検討することで、より長くおいしさを維持するための品質制御にもつなげていきたいと考えています。



地域連携を踏まえた知的財産の管理・運用

地域基盤研究機構
准教授 川畑 哲郎

今年度7月に着任しました。2011（平成23）年3月に大学院修了後、大学にて天然資源（薬用植物や海洋生物）の抽出エキスから有効成分を探索する研究に従事してまいりました。その後、大学で生じた研究成果を社会実装するために、知的財産を活用した、大学と企業間との橋渡しに貢献したいという思いから2015（平成27）年7月より産学連携や知的財産に関する業務に従事しております。

前職では知財戦略の一環として、研究者からの発明相談（発明の発掘）に対応し、相談のあった発明について、先行技術文献の調査や新規性の判断などを担当しておりました。また、研究者向けに知財セミナーの企画も担当しておりました。

本学では地域基盤研究機構に所属し、これまでの経験を活かし、発明発掘や知的財産の管理・運用、知的財産に関する契約等の業務を担当いたします。

また、知的財産に関する勉強会やセミナー等も随時企画していく予定です。

研究としては、「地域連携×知的財産権」に関するテーマで検討していきたいと考えております。

知的財産に関する業務は、先生方の研究成果を活用することになるため、先生方との連携が必要不可欠です。研究成果を社会実装につなげるために知的財産の観点から本学に貢献できればと考えておりますので、何か新しいアイデアや知的財産に関する疑問等がありましたら、是非気軽にご相談ください。

皆様と連携して1件でも多くの研究成果を知的財産権として保護し、それに基づいて外部資金、共同研究、ライセンス契約等を増やしていければと考えております。どうぞよろしく願いいたします。



地域連携・産学連携

「包括協定記念行事～社会を変革するために～」を開講しました

11月8日、叡啓大学401・402講義室において、サンフレッチェ広島との包括連携協定事業の一環として、連携講座「包括協定記念行事～社会を変革するために～」を開催しました。

先行きが不透明な社会情勢の中、次世代を担う若者たちがそれぞれの夢を描くとともに、多様な主体が活躍し、みなぎる力で地域が活性化することが期待されています。この連携講座は、サンフレッチェ広島レジーナの選手3名（川島はるな選手、中村楓選手、呉屋絵理子選手）をゲストにお招きし、その経験にもとづくキャリアデザインをはじめ、人と人をつなげ、人の心を豊かにするスポーツの持つエネルギーなどについて学ぶ目的で実施しました。

講座では、本学経営情報学部経営学科4年河野さん、地域創生学部地域創生学科健康科学コース3年下紺さん、鈴木さんと叡啓大学ソーシャルシステムデザイン学部ソーシャルシステムデザイン学科2年岬さん、1年小原さんの5名がインタビュアーとなり、それぞれの専門を活かした質問を選手にインタビューしました。

河野さんは、自身の所属するゼミで観光まちづくりプラン「広島カラーツーリズム」を企画した経験から、広島県の魅力やサッカーを通じてどのように地域社会に貢献したいかを質問しました。

下紺さんと鈴木さんは、健康科学コースで学んだ知識を生かして、選手が普段の食生活で気を付けていること、よく食べている食品や料理等の食事管理について質問をしました。下紺さんは将来スポーツ選手を食事や健康面でサポートする管理栄養士を目指しており、とても貴重な体験となったと語っていました。

岬さんは好きなことを職業にすること、子ども向けのサッカースクールで次世代に継承していきたいことなど、レジーナやサッカーの魅力について質問をしました。

小原さんは自身のサッカー経験から、ジュニア世代で心がけるべきこと、またレジーナ選手の子どもの時代の練習時間やプロ選手を目指した理由等を質問しました。

一般の受講者や、本学・叡啓大学の学生からも積極的に質問が寄せられました。その中で、試合中負けているときに何を考えているかという質問に対して、3選手とも負けることをイメージしたり意識した

りせず最後まで勝つことを考えてプレーしているという回答が印象に残りました。何事も諦めない姿勢が大切だということを改めて学ぶ機会になったと思います。

またアンケートには、学生インタビュアーのしつかりとした話し方や多角的に物事を捉える質問があったからこそ素晴らしい講座になった。あるいは、レジーナ選手の生の声を聴くことができ継続的に開催してほしいといった感想をいただきました。

レジーナ選手からは、「普段大学生と対面で話すことがないため貴重な機会となった。いつもプレーのことを考えるので頭がいっぱいだが、レジーナと自分のことを見つめなおすことができた。」という感想とともに、これから、広島に根付いて皆さんと一緒に広島を盛り上げていきたいという意見もいただきました。



学生インタビュアーのみなさん



参加者全員で集合写真

キャンパスメンバーズ

「令和4年度広島交響楽団特別講義」を開講しました

12月8日、広島キャンパス大講義室において、広島交響楽団特別講義を開催しました。今年度は、「トロンボーンの世界と音楽家の道」というテーマでバス・トロンボーン奏者の武崎創一郎さんに講義していただきました。

実際に楽器を演奏し、音が出る仕組みや楽器の構造を説明しながら、トロンボーンという楽器の歴史やオーケストラにトロンボーンがどのように組み込まれていったかについてお話していただきました。

また、武崎さんがどのようにしてトロンボーンと出会ったか、どのような経緯で広島交響楽団に入団したのか、演奏家の日常生活などについてもお聞かせいただきました。

参加者からは「あまりなじみのないトロンボーンの世界、歴史など色々な音色を分かりやすく説明してください、とても興味深く思った。」という声もあり、生演奏を聴きながらクラシック音楽の知識を深める貴重な機会となりました。

なお、講義を収録した動画を、学内限定で配信しました。



広島交響楽団 演奏する武崎創一郎さん

地域連携・産学連携

令和4年度包括協定自治体との意見交換会

11月14日、広島キャンパス1215会議室において、広島キャンパスが担当する3つの協定自治体（廿日市市、江田島市、広島市南区）との意見交換会を実施しました。

例年は、包括協定を結んでいる全自治体担当者のみなさんが一堂に集まって実施していた意見交換会ですが、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえて、昨年度に引き続きキャンパスごとに実施し、現場に即した実質的な意見交換の機会とすることを意図しました。

まず、今年度実施している3件の地域戦略協働プロジェクト「吉和地域におけるマイナンバーカード取得率向上への取り組み（廿日市市）」、「モニタリングを通じたきゅうりの収量増加及びスマート農業の普及に向けた土台形成（江田島市）」、「宇品線の記憶の継承と跡地利用の活性化（広島市南区）」について、それぞれの進捗状況を報告しました。

いずれのプロジェクトも、コロナ禍で学生が地域に入っていく活動が制約を受けているものの、さまざまな工夫によってその制約を乗り越え、課題解決のため取り組みが着実に進められていることが確認できました。

その後、各プロジェクトの進捗状況をふまえながら、それぞれの自治体との今後の提携の在り方などについて意見交換を行いました。

引き続き、地域課題の解決のために大学が積極的な役割を果たす必要があるといった意見や、学生が参画することによって、自治体職員だけでは実現できなかった新しい展開が可能になるといった意見が出されました。また、来年度以降の連携課題などについても、有意義な協議を実施することができました。



学生と地域の方々との交流会
(宇品線プロジェクト)

庄原キャンパス

SHOBARA CAMPUS

地域連携

学生がデザインしたラッピングバスの発車記念式典を開催

12月27日に備後庄原駅において、学生がデザインしたラッピングバスの発車記念式典を開催しました。

この事業は路線バスを所有する備北交通株式会社から生物資源科学部のPRを目的としたデザインを掲載してみてもどうかと提案頂いたものです。頂いた提案をもとに庄原キャンパス内で協議し、庄原キャンパス内でデザインを公募のうえ、採用しました。

採用したデザインは2つで、1つは生命システム科学専攻博士課程前期2年生の山本真由さんの作品です。この作品は、山本さんが好きな夕暮れ時のキャンパスをテーマに描かれたもので、山本さんは、「暗くなる大学において、外灯や建物の明かりが際立つことで、先生や仲間たちが遅い時間までいることが自分自身も励みになる情景」と説明されました。

2つ目は生命環境学部4年生の川村愛香さん、矢野華梨さん2名による共同作品です。



この作品は、「庄原から世界へ」をテーマとし、庄原キャンパスのシンボルである噴水を地球儀に見立てたデザインとし、「バスが多く目の人に留まり、少しでも多くの方が庄原キャンパスに興味を持っていただけると嬉しい」と説明されました。

ラッピングバスは12月26日から2023（令和5）年6月26日まで庄原市内を循環していますので、ぜひご覧ください。

庄原市立山内小学校地域公開研究会及び学校運営協議会

生物資源科学部生命環境学科の藤井宣彰准教授が学校運営協議会委員を務める庄原市立山内小学校で、9月30日に地域公開研究会、10月20日に第2回学校運営協議会が開催されました。

学校運営協議会制度はコミュニティ・スクールとも呼ばれ、学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組み、特色ある学校づくりを進める仕組みです。庄原市では今年度より、市内全小中学校が学校運営協議会制度を導入しました。

地域公開研究会には保護者のほか、学校運営協議会委員も参加し、授業を参観しました。

学校運営協議会では、授業を参観し、学校から学校評価中間報告がされ、意見交換を行いました。学校運営協議会制度が導入されたこともあり、児童と本学学生との交流も進めていきたいとの話がありました。

尾道市立久保小学校訪問

12月7日に生物資源科学部生命環境学科の藤井宣彰准教授が、尾道市立久保小学校を訪問しました。

2021（令和3）年度に、中心部の久保小学校、長江小学校、土堂小学校は、学校施設の老朽化や自然災害への対応のため、仮校舎へ移転しました。その後の学校の在り方について、2021（令和3）年度本学重点研究事業「今後の尾道市立小中学校の在り方に関する研究」で、保護者、教職員、学校評議員にアンケート調査を行い、意見を聞きました。この結果も参照しながら、尾道市教育委員会は、3小学校を1校に統合して現在の長江中学校に置き、長江中学校と久保中学校を1校に統合して現在の久保中学校に置き、近隣の山波小学校と共に小中一貫教育を行う案を発表されました。現在、保護者や地域住民への説明や意見交換を行っておられます。

久保小学校は現在、久保中学校敷地内に仮移転されており、校内を豊田浩矢校長に案内していただきました。プレハブ校舎ながら、内装は綺麗で、配慮が必要な児童のことも考えられた造りになっていました。授業時間が小学校は45分、中学校は50分でチャイムがずれますが、休み時間で調整してできるだけ同じ時間にチャイムが鳴るようにされていました。校舎や運動場など、小中学校で分け合って利用されていました。

世羅町の広島県立世羅高等学校支援への協力

世羅町は将来の町を担う人材の確保育成に取り組むため、町内唯一の高等学校である広島県立世羅高等学校に対して、通学・学習環境・部活動等の支援事業を2016（平成28）年度より開始されています。

世羅高校の入学者は定員に満たない状況で推移しており、町内の3中学校からの世羅高校進学率は50%程度で推移しています。中学生の進路選択には、学力や部活動など様々な理由があると想定されますが、世羅町としては志望動機の傾向を把握できていません。

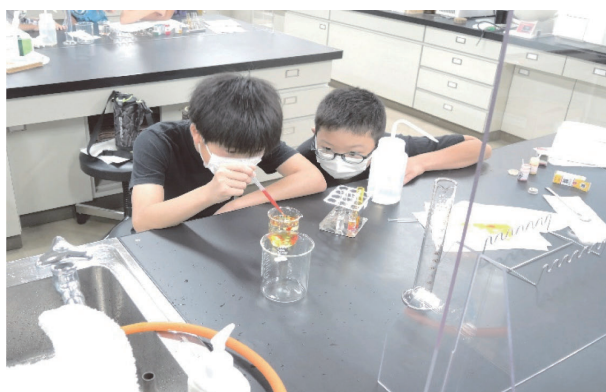
そこで、生物資源科学部生命環境学科の藤井宣彰准教授が「今後の県立世羅高等学校の魅力度向上に関する研究」と題し、個人として世羅町に協力することに合意しました。2023（令和5）年度に、町内中学生、世羅高校生、世羅在住で町外高校進学者を対象としてアンケート調査を行い、中学卒業時の進路選択の志望動機の傾向を把握し、世羅高校の魅力度を向上させ生徒数の確保につなげたいと考えています。

公開講座

公開講座「おもしろ「りか(食品)」実験」

8月19日に生物資源科学部地域資源開発学科の吉野智之准教授と山本幸弘准教授が実験講座を開催しました。

吉野准教授はゼリーを作る実験を行い、材料によっては固まらない原因を考えたり、山本准教授は人工いくらを作ることで、自然いくらと人工いくらの見分け方について調べたりしました。また施設実習として、フィールド科学教育研究センター内で栽培したぶどう（ピオーネ）の収穫体験を行い、参加した小学生はとても楽しそうに活動していました。



研究紹介

植物の生殖に関する研究

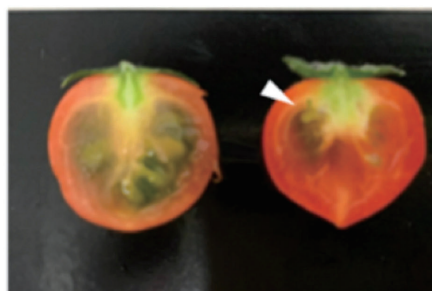
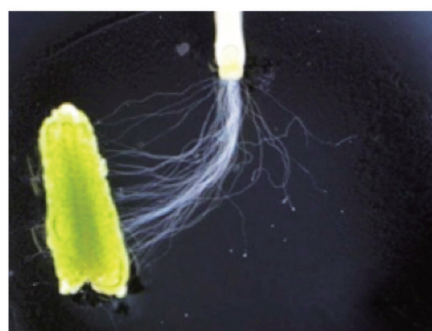
生物資源科学部生命環境学科
生命科学コース 教授 金岡 雅浩

10月に生物資源科学部に着任しました、金岡と申します。私は植物の受精や環境応答に興味を持っており、とくに受精に関わる組織や細胞で働く遺伝子の機能を調べております。



植物の精細胞（動物の精子に相当）は、花粉の中で作られます。花粉が雌しべに付着すると、花粉管という管状の細胞が発芽して雌しべの中を伸びていき、精細胞が胚珠へと届けられ、そこで受精が起こります。花粉管は胚珠から分泌される「花粉管誘引因子」によって迷うことなく目的地へと到着します（写真上：培地上で花粉管が胚珠へ誘引されている様子）。この花粉管誘引因子の同定や、植物間での比較を通じて、誘引因子の性質を明らかにするのが目標です。

また、トマトの卵細胞で発現している遺伝子をゲノム編集技術により働かなくすると、種子がほとんどできなくなることが分かりました（写真下：左が通常のトマト、右がゲノム編集トマト）。この知見を応用すれば「種なしトマト」を作ることができるかもしれません。このように、基礎研究で得られた知見を品種改良に応用するような研究の展開も目指しています。



三原キャンパス

MIHARA CAMPUS

地域活動

三原市チャンネル「県大でけんこう！」

三原市と三原テレビ放送株式会社と協力し、本学の紹介や日々の健康に役立つ情報発信番組「三原市チャンネル「県大でけんこう！」」を制作しました。

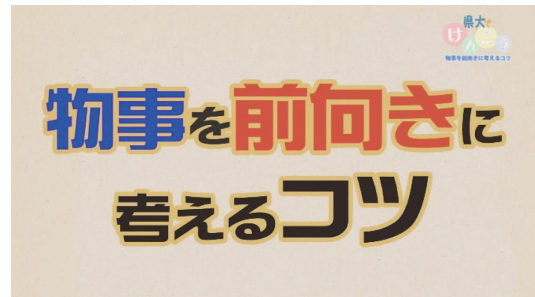
2021（令和3）年度は、地域連携センター報第33号でご紹介しました、第1回「のどをきたえて誤嚥を防ごう！～自宅のできる嚥下体操～」に続き、第2回「ブルーな日々にサヨナラ！～月経との上手な付き合い方～」、第3回「肯定的に考えるコツ」、第4回「高齢者になっても知能は衰えない 正しい姿勢は脳の機能を維持する」の計4番組を制作、放送されました。

第2回「ブルーな日々にサヨナラ！」では、女性の悩みの種であるPMSや月経困難症の原因や改善方法が紹介されました。改善方法の1つである“冷えを予防し身体を温める”では、具体的な温め方と効果について紹介されています。また、月経痛を和らげるストレッチでは、立った姿勢と椅子に座って行うものが実際の動作と共に紹介され、月経に伴うつらさの和らげ方に理解が深まります。

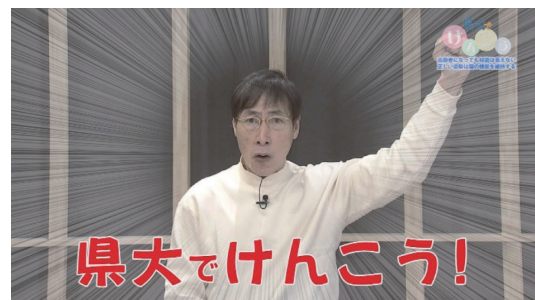


第3回は、看護学コース教員と保健福祉学専攻科学生による対話形式で、気分がふさいでしまった時でも「肯定的に考えるコツ」を知って、前向きに過ごすことができる方法が紹介されました。特に、コロナ禍で人との交流や外出の機会が減り、気分が落ち込んでしまうこともあります。気持ちを切り替えて明るく過ごすことは、現代社会において非常に大切なことです。毎日を前向きにする考え方のヒントが

数多く含まれた内容です。



第4回は「高齢者になっても知能は衰えない 正しい姿勢は脳の機能を維持する」をテーマに、作業療法の観点から、脳と姿勢の関係や正しい姿勢を保つコツ、健康づくりに役立つ体操が実践の際に気を付けるポイントや動作、姿勢と共に、わかりやすく紹介されました。特に、ふくらはぎの体操は、簡単な動きでしっかり鍛えられ、日々の生活に取り入れることで機能を維持することに活かすことができる運動です。



放送終了後、過去に三原シティカレッジを受講された市民から「放送を見ました」と番組の感想を頂いた教員もあり、本学の活動と地域のつながりを強く感じました。

本学公式YouTubeで番組アーカイブが公開されています。1番組が約10分で、すぐに実践可能な健康に役立つ情報満載です。是非ご覧ください。

第1回「のどをきたえて誤嚥を防ごう！～自宅のできる嚥下体操～」

<https://www.youtube.com/watch?v=iv9n2aaXEEM>

第2回「ブルーな日々にサヨナラ！～月経との上手な付き合い方～」

https://www.youtube.com/watch?v=yoJD1_bfmBQ

第3回「肯定的に考えるコツ」

<https://www.youtube.com/watch?v=rcIS4CfxdpY>

第4回「高齢者になっても知能は衰えない 正しい姿勢は脳の機能を維持する」

<https://www.youtube.com/watch?v=N9-6UYTDV3w>

生涯学習

履修証明プログラムを開講

三原キャンパスでは、令和4年度に二つの履修証明プログラムを開講しました。

[1] Family Reunification Program (家族再統合支援プログラム)

本講座は、問題を抱えた家族が、機能的な家族になっていく過程を支援するために、専門家に求められる基礎的な知識と技術の修得と、実践力の向上を目的としています。

プログラム責任者である人間福祉学コース大下由美准教授を代表として、外部講師（本学大学院修了生で児童家族支援に関与している専門職）、博士前期・後期課程の院生と協働して、以下のプログラムを実施しています。

回	内 容
1	家族支援の実践実技講座1 『家族支援のための基礎理論』
2	家族支援の実践実技講座2 『家族支援のための変容技法論』
3	家族支援の実践実技講座3 『家族支援の実際（事例検討）』
4	家族支援の実践実技講座4 『家族支援の実際（ロールプレイ）』
5	家族の問題の評定と介入に関する知識と技術1
6	家族の問題の評定と介入に関する知識と技術2
7	家族の問題の評定と介入に関する知識と技術3
8	家族の問題の評定と介入に関する知識と技術4
9	家族の問題の評定と介入に関する知識と技術5
10	事例に基づく演習1
11	事例に基づく演習2
12	事例に基づく演習3
13	事例に基づく演習4
14	事例に基づく演習5
15	事例に基づく演習6

実施期間は2022（令和4）年7月～2023（令和5）年6月【全15回・総時間数60時間】です。

現在、受講者3人（定員5人）で実施しており、受講生からは充実した内容の講座を受講できているといった声が寄せられています。

[2] 主任介護支援専門員を対象としたスキルアップ講座 「スーパーバイザー・レベルアップ講座」

本講座は、(1) 地域包括ケア構築にかかる専門知識・技術を修得するための科目、(2) 多問題世帯など家族に介入し適切に支援するために必要な専門知識・技術を修得する科目、(3) 他の介護支援専門員を適切にスーパーバイズするために必要な専門知識・

技術を修得する科目、(4) ケアマネジメントを適切に実施するのに必要な関連科目から構成されています。全部で12回、1講座が6時間となっており、全体で72時間、実施については、講義と演習を交えています。

講師は、プログラム責任者の人間福祉学コース金子努教授を中心に、保健福祉学部の教員がそれぞれの専門領域を踏まえ担当しました。

受講者は、現場の主任介護支援専門員8人（募集定員15人）で、2023（令和5）年3月に終了予定となっています。

各講座終了後のアンケート結果では受講者の満足度の高さが示されており、自由記述では、「新たな視点を得る機会になった」「現場で即実践してみたい」などの声が寄せられていました。

	内 容	
1	地域共生社会を実現するためのインフォーマル・ケア活性化 ～知識と技術～	全3回・18時間
2	多問題世帯のアセスメントと介入法	全3回・18時間
3	事例を用いたグループ・スーパービジョンの方法と実際	全3回・18時間
4	ストーリーによる個人と社会の理解	全3回・6時間
5	骨を知り、骨折予防を考える ～ご自身の骨密度測定を体験し骨を知る。そして、ご自身の事例からの検討～	全1回・6時間
6	高齢者のコミュニケーション障害と摂食嚥下・栄養障害 ～言語聴覚士が伝えたい支援のヒント～	全1回・6時間

今年度開講した二つの履修証明プログラムについては、受講者の満足度が高く、ニーズに沿った内容を提供できているものと評価しています。その一方で、二つのプログラムいずれもが、募集定員を下回ってしまったことについては、募集時期が遅くなってしまったことなどが影響したものと考えています。


次年度の募集については、募集時期を早めるとともに周知の方法も工夫していく予定です。

R4年度履修証明プログラム「スーパーバイザーレベルアップ講座」 2023.01.28

事例を用いたグループスーパービジョンの方法と実際

【学習内容】

- 1 スーパーバイザーである事例提供者に焦点を当て、事例提供者の思考過程を引き出しながら展開していくために必要な知識と技術を学修します。
- 2 スーパーバイザーと検討課題を共有し、再アセスメントしていくために必要な知識と技術を学修します。
- 3 事例を通じてスーパーバイザーの抱える課題、論点を明確化するために必要な知識と技術を学修します。



主任介護支援専門員を対象としたスキルアップ講座
「スーパーバイザー・レベルアップ講座」

研究紹介

子ども虐待と親のメンタルヘルス問題 — その予防と「応援」の研究

保健福祉学部保健福祉学科
人間福祉学コース 教授 松宮 透 高

2000年代以降、子ども虐待が大きな社会問題として認識されるようになり、近年ではヤングケアラーの存在も注目されています。児童福祉法や児童虐待防止法の改正などを通して、厳しい状況に置かれた子どもたちへの対策が進展してはいますが、未だに悲報が途切れることはありません。



私が精神保健領域のソーシャルワーク実践と研究を経て子ども虐待問題に関心を持ったのは、子ども虐待と親のメンタルヘルス問題を過剰に結びつける当時の論調に、強い違和感を覚えたからでした。たしかに、子ども虐待の背景に親のメンタルヘルス問題が見られることは少なくありません。しかし、当事者へのインタビュー調査からは、生活の困窮、社会的孤立などが引き金になっていることも読み取れました。こうした苦労がうまく解消できず助けも得られないと、次の苦労の呼び水になり、雪だるまのように複合し膨らんで行くのです。このメカニズムに対応したメンタルヘルス支援、生活支援、子育て支援、子ども支援がトータルに展開できる体制が、圧倒的に足りていない、そんな課題も見えてきました。

また、苦労しながらもリカバリーして子育てを全うできた世帯にも多く出会いました。治療、管理、保護の必要な人としてだけ捉えるのではなく、親と子どもを暮らしや人生の主人公として、力や可能性を活かせるよう働きかけること、すなわち「応援」する視点の大切さも、当事者と支援者から学びました。困難な課題を前に疲れ果て、連携がうまくできない支援者たちへの「応援」の必要性も強く感じ、懸命に取り組んでいるところです。

国内外の先駆的な支援実践例と出会い、また調査活動を展開する中で気づいたのは、機能的な支援チームには「笑い」と相互の「応援」が見られるということです。支援者間の関係性は、当事者と支援者の関係性まで豊かにするのも知れません。「応援」し合える支援チーム、さらにはそんな社会づくりを目指して、研究を展開したいと思っています。

障害のある子どもの発達支援から家族、そして共生社会の実現へ —ミクロ、メゾ、マクロの視点での研究—

保健福祉学部保健福祉学科
人間福祉学コース 准教授 米倉 裕希子

若い頃、私は障害児の療育に関わる仕事をしており、「遊び」を通じた発達支援に関する実践研究を行っていました。ある自閉スペクトラム症のお子さんは「つむじ」にこだわりがあることで他児と遊ぶことができませんでした。こだわりを否定せず、つむじを媒介とすることで他児への関心が広がり一緒に遊ぶようになりました。実践はつい「良くなった」と思いがちです。根拠に基づく実践の視点で客観的に評価するため「乳幼児社会性プロセススケール」を用いて介入前後を比較し検証しました。



子どもの支援では、やはり親へ目が向くようになります。当時の私は親が子どもの障害を受容できるよう支援することが最も重要なことだと思い込み、受容できていない親を批判的にとらえていました。しかし、そもそも「受容」とは何かという壁にぶつかり、「受容」が曖昧な概念であり、さらには自分の思い通りにならない親を受容していないと考えていたことに気づきました。大切なことは家族が正しい知識と情報をもとに、具体的な対応方法を知り、同じ悩みをもつ仲間と出会い孤立しないことだと考え、ペアレント・トレーニングに関する研究を行うようになりました。保護者へのインタビューを通して得た知見、例えば子どもの攻撃的な行動にイライラすることや、きょうだいや学校の先生などのソーシャルサポートが肯定的な感情に影響するなどの結果をペアレント・トレーニングに役立てることを考えています。

そして究極の家族支援とは地域や社会の障害に対する理解、つまり差別や偏見をなくすことだという結論にたどり着きます。そこで、地域社会への入り口として、サポーター養成講座や福祉従事者に対する研修プログラムの内容とその効果についての研究を行っています。障害者への肯定的な態度や共感に影響するのはともに学んだ経験です。これからは、多様な子どもが共に生きる社会、共生社会の実現に向けた研究活動を行いたいと考えています。

研究紹介

人・AI・ロボット技術を駆使した
リハビリテーション研究保健福祉学部保健福祉学科
理学療法学コース 教授 島谷 康 司

近年、人工知能（AI）やロボット技術を活用したリハビリテーション治療が普及しつつあります。

私の研究室では、島圭介 准教授（横浜国立大学）らと共同し、「対象者の麻痺した手足に理学療法士（PT）の望ましい動きを伝達して運動麻痺の回復をサポートする技術」を世界で初めて提案（特許取得）しました。この技術では、①対象者とPTの双方に、筋肉の動きを読み取る筋電装置と筋肉を動かす電気刺激装置をそれぞれ装着します。②PTの筋肉の動きをパソコンに取り込みAIで運動を識別・記憶させます。③AIを通して対象者の完全に麻痺した動かない手に電気を流すと、PTと同じ動きをリアルタイムに伝達することが可能です。例えば、PTが手の指を曲げる・伸ばすと、麻痺した対象者の手の指が同時に曲げられる・伸ばされるといった具合です。また、単純な曲げ伸ばしの運動だけでなく、ペットボルのキャップを人差し指と親指で掴み、キャップを約20cm前方のターゲットまで運び、正確に置くなどの細かな行為の伝達も可能です。さらに、この技術は、対象者の望ましくない麻痺した筋肉や関節の動きをPTが感じる（伝達される）ことも可能です。この技術の特徴は、双方向の運動伝達を実現したことによって、望ましい運動（あるいは、望ましくない運動）をお互いが直感的に感じ、指導・修正、サポートできることです。今後は、対象者とPTが家と病院など離れた場所でリハビリをする「遠隔リハビリテーション」への応用も考えています。



足の健康とフットウェアに関する研究

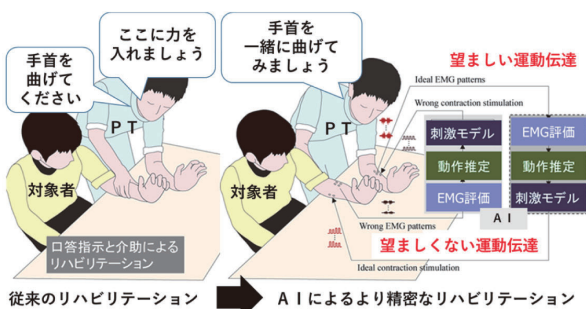
保健福祉学部保健福祉学科
理学療法学コース 教授 長谷川 正 哉

ヒトの足は身体を支えるための土台であり、立位、歩行時には衝撃吸収、身体の支持、体重移動、駆出力の伝達などの役割を担っています。また、靴などのフットウェアはこれらの足の機能をサポートする役割があります。一方、足のトラブルを抱える場合や不適切なフットウェアを着用した場合には、足（土台）が不安定になり、転倒やケガの発生につながることがあります。



そこで、我々の研究グループでは、足の健康増進や適切なフットウェアに関する研究を進めており、今回はその中から足指の研究について紹介します。足指は重心が前方や側方に移動する際にブレーキをかける役割があります。一方、外反母趾や内反小趾、巻き爪、浮き指など、足指まわりのトラブルは老若男女問わず発生し、これらのトラブルを抱える方ではバランス能力や歩行能力が低下することが報告されています。また、足指のトラブルを抱えていない場合でも靴の着用や運動不足などにより、足指の運動機能が低下している場合があります。例えば、「足指ジャンケン」のゲー、チョコキ、パーが両足とも可能でしょうか？ これらの動きが難しい場合、足指の柔軟性や筋力がすでに低下している可能性があります。ご注意ください。

しかし、ご安心下さい！我々の研究グループでは、足の健康増進に関わる運動器具やフットウェアの開発を進めており、これまでの研究、開発から得られた知見を基に、広島県下の自治体や教育機関と連携し講演や介護予防事業を実施しています。ご興味がありましたら、是非地域連携センターにお問い合わせ下さい。



熊野町「けんこう華齢教室」の様子

もみじ銀行との共催講座を開催しました

本学はもみじ銀行と2014（平成26）年10月に包括的連携協力に関する協定を結びました。今回はその協定に基づく事業として共催の講座を実施しました。昨年度は本学が協定を結んでいる金融機関の地域貢献活動をセンター報にて紹介しました。その後、もみじ銀行から共同で実施する講座のご提案をいただき、本学からは健康をテーマにもみじ銀行からは金融をテーマに講座内容を提案することとし、「健康」×「金融」という、普段はあまり結びつかない二つからなる連携講座が開催される運びとなりました。今後も異業種との連携に基づく講座を実施していきたいと考えています。

受講者からは「話が聞いて良かった。今回知ったことを日々の生活や心がけに活用していきたい」「仕事や自分のQOLの向上になりそうです」などの感想が寄せられました。



「更年期以降を健康美人に過ごす」講座の様子



「バランスのとれた食事とは？」講座の様子

会場	開催日	講座タイトル	講師
広島	10月12日(水)	バランスのとれた食事とは？	地域創生学部 教授 森脇 弘子
	11月2日(水)	健康を維持する食事と栄養	地域創生学部 准教授 神原 知佐子
	11月21日(月)	健康へと導く食と運動の役割	地域創生学部 准教授 鍛島 秀明
	12月15日(木)	健康づくりと運動	地域創生学部 教授 三浦 朗
福山	10月21日(金)	更年期以降を健康美人に過ごす	助産学専攻科 教授 宮下 ルリ子
	1月27日(金)	ブルーな日々にサヨナラ！ ～月経との上手な付き合い方～	助産学専攻科 助教 金川 景子

編集後記

地域連携センター第35・36合併号をお届けします。本号では、令和4年度に開講した公開講座や、この度初めての試みとなる広島県内12大学の学生による広島県大学生地域連携活動発表会についてご紹介しました。各キャンパスのページでは、包括協定先との連携事業や地域交流、研究者紹介など、各キャンパスの長を大いに活かした活動の様子を報告しています。

今後も地域の皆様のご期待に応えられるように様々な事業に取り組んでまいりますので、引き続きご支援とご協力をお願いいたします。

編集発行

県立広島大学地域基盤研究機構地域連携センター
〒734-8558広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
電話 (082) 251-9534/E-mail:renkei@pu-hiroshima.ac.jp
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/>

各キャンパス問合せ先

地域基盤研究機構庄原地域連携センター
〒727-0023広島県庄原市七塚町5562番地
電話 (0824) 74-1000/E-mail:gakujutu@pu-hiroshima.ac.jp

地域基盤研究機構三原地域連携センター
〒723-0053広島県三原市学園町1番1号
電話 (0848) 60-1120/E-mail:mrenkei@pu-hiroshima.ac.jp